

[学部企画報告]ロシア人から見た日本語の面白さ : Kostyrkin Alexander先生講演

江村, 裕文

(出版者 / Publisher)

法政大学国際文化学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

異文化 : journal of intercultural communication: ibunka

(巻 / Volume)

15

(開始ページ / Start Page)

9

(終了ページ / End Page)

10

(発行年 / Year)

2014-04

[学部企画報告]

ロシア人から見た日本語の面白さ —Kostyrkin Alexander 先生講演—

報告者：江村 裕文

[講演内容の要約]

日本語とロシア語とは言語学的には無関係である。ここで言語学的とは、たとえば「歴史言語学」とか「比較言語学」という観点からみれば、という意味である。にもかかわらず、一般言語学的には共通点が指摘できる。ここで一般言語学的とは、ヒトがあることを表現するために言語を使用した場合においては、言語の基本的な機能として何語であっても類似した同じような現象が見られるという意味である。

たとえば日本語の「母（はは）」とか「種（たね）」という表現（単語＝形態素）は、デノテーションとしては、それぞれ「はは」とか「たね」というシニフィアンが「母」とか「種」というシニフィエを指し示すという意味で、通常の使い方がなされるが、コノテーションとしては、いずれも「(なにかを) 産み出すもの」「(なにかを) つくりだすもの」といった意味を持つ表現として使用される。この点ではロシア語も同様で、ロシア語の「母」や「種」も「(なにかを) 産み出すもの」「(なにかを) つくりだすもの」というコノテーションを持つ表現として使用されるのである。

これがまさにここで指摘したい共通点である。

いうまでもなく現実の世界は、無限の出来事の集合である。その無限の出来事の個々を、限られた数の音の単位とこれもまた限られた数の意味の単位（＝単語＝形態素）、およびその二者を「二重分節」によって組み合わせる、これもまた有限個の組み立て規則（＝文法）によっ

て「表現」するのが言語の機能である。これを言語のプロダクティビリティ（生産性）と称する。

ではどういうメカニズムで、有限個の手段で無限の現実に対処して表現できるのか。そのためには、広い意味での「比喩」を用いるしか方法はない。一般言語学的に共通性があるといえるのは、この「比喩」の使用の仕方であった。

どんな言語でも、あらゆる現実を表現できるのは、この「比喩」によるのである。メタファーやメトニミーに注目することで、言語の生産性のメカニズムに迫ることができるという現象について、もっと興味を持ってもらい、知ってもらいたい。

-
- 日時：2013年5月10日（金）5時限目（16時50分～18時20分）
 - 場所：法政大学市ヶ谷キャンパス 外濠校舎4階S407号教室
 - 講演者：Kostyrkin Alexander
 - 所属：Institute of Oriental Studies, Language Department
Russian Academy of Sciences
 - 研究テーマ：日本語の語彙論、統辞論、コーパス研究
 - 主な業績：Corpus Projects in Japan, Moscow, 2004
露和・和露音楽用語小辞典、東京、2005
日本語—ロシア語機械翻訳プロジェクト JARAP、東京、2008
和英露産業設備据付用語辞典、Moscow、2010
和英露建築用語辞典、Moscow、2012
 - 司会：江村裕文（法政大学国際文化学部教授）
-